

初期ヴァージニア植民とジェームズ一世

高橋正平

序

周知のごとく、イギリスのヴァージニア植民はロンドン・ヴァージニア会社によって行われた。ロンドン・ヴァージニア会社は1606年4月ジェームズ一世の特許状を受け、正式にイギリス政府の認可を受けた事業としてヴァージニアの植民に着手する。ジェームズ一世は植民のそもそもの初めから深く植民に関わっており、ジェームズ一世の意向がヴァージニア植民に反映されていると考えるのは当然のことである。ジェームズ一世とヴァージニア植民との関わりには二点考えられる。その一つは、ジェームズ一世のヴァージニア会社との関係である。ヴァージニア会社はジェームズ一世によって特許状を交付されており、ジェームズ一世が実際にはヴァージニア会社を運営・管理すべき性質の会社であった。当初はロンドンにヴァージニア会社を統括する王立参事会が、ヴァージニア植民地には現地参事会がそれぞれ置かれていた。ヴァージニアの統治はロンドンの参事会が選んだ総督と現地の参事会の間で行われ、総督不在でヴァージニアが運営された。しかしながら第二次特許状ではこの非現実的な運営方法が改められ、運営・管理は全面的に王から会社に移行され、徐々に植民関係者は独自に「民主的に」ヴァージニア植民の総裁を選び、本国から離脱していく。これが最終的には本国と同様な王政的な政府を望むジェームズ一世の怒りに触れ、1624年特許状を取り消されることになる。それが逆にヴァージニアにおける民主的運営に大きく寄与することとなり、最終的にはアメリカで最初の「共和政府」建設へと至る。ジェームズ一世側と反ジェームズ一世側とのヴァージニア植民運営をめぐる確執はすでに様々な人が扱っているが¹⁾、ジェームズ一世のヴァージニア会社との関わりはジェームズ一世が予想していたようには進展しなかった。ジェームズ一世のヴァージニア植民との第一の関係はイギリス国内にあったが、それ以上に深刻なジェームズ一世のヴァージニア植民との関わりは対外的な関係であり、しかもそれはイギリスの前に大きく立ちだかる「大国」スペインとの関係であったと言っても過言ではない。いわば国内外でジェームズ一世はヴァージニア植民をめぐる難題に直面していたのである。特にスペインとの関係は政治的にやっかいな問題であった。大国スペインとの和平を望んでいたジェームズ一世にとってスペインの機嫌を損なうことなくいかにスペインとの友好関係を築き、維持しかつヴァージニア植民政策を続行するかはジェームズ一世にとってはジェームズ一世王朝存亡に関わる大問題であった。ヴァージニア植民が大国スペインの激怒に触れたらスペインは強大な軍事力を背景に一気にヴァージニアを攻撃し、ヴァージニアを奪取するかもしれない。イギリスのスペイン大使からはそのような緊迫した空気が刻々ジェームズ一世に送られてくる。しかしながら、ジェームズ一世は直接ヴァージニア植民

に関して命令や指示を出し、積極的に植民を指導・管理する文章を残していない。我々がヴァージニア植民に関するジェームズ一世動向を知るのはスペイン駐在のイギリス大使、フランス駐在のイギリス大使及びスペインの駐イギリス大使を通してである。特にスペイン駐イギリス大使スニガ（Zuniga）はジェームズ一世と会見し、直接ヴァージニア植民に関して率直な意見交換を行っている。フィリップ三世へのスニガの報告はジェームズ一世との生々しい会見報告となっており、ジェームズ一世のヴァージニア植民に関する「肉声」を知るうえで貴重な資料となっている。本研究では主としてこれらの資料からジェームズ一世がヴァージニア植民に関していかなる態度・見解を取っていたのかを明らかにし、初期ヴァージニア植民が直面していた問題点を明確にしたい。

1. コーンウォリス（Sir Charles Cornwallis）とスニガ（Don Pedro de Zuniga）

コーンウォリスは1605年から1609年までイギリスのスペイン大使を勤め、スニガは同じ時期1605年から1610年までイギリス大使をそれぞれ務めている。ジェームズ一世の最初の特許状は1606年4月に発布されているので両大使はヴァージニア植民が始まったときにそれぞれ相手方の国に滞在し、自国の利害とのからみからヴァージニア植民と関わっていたことになる。コーンウォリスはマドリッドからジェームズ一世へスペインの動向を送っていたはずであるが残念ながらその書簡は多く残っていない。ただジェームズ一世の長男ヘンリーに関して、父ジェームズ一世の許可があればヘンリーはスペインと戦う気があると記しているだけである⁽²⁾。コーンウォリスのもう一つの現存する書簡はマドリッド赴任3年後にイギリスの國務大臣ソールズベリー（Salisbury）にあてた書簡である。ヴァージニア会社がジェームズ一世の特許状を得た2年後であるが、そこでコーンウォリスはスペインの西インド諸島評議会議長レモス（Lemos）伯爵との会見の様子をソールズベリーに報告している⁽³⁾。それは主としてスペインが自国領土と主張する海域におけるイギリス人の拿捕に関しての意見の交換である。自国の領海内の航行を禁ずるスペインと公海の航行自由を主張するイギリスとの見解の違いがコーンウォリスとレモス伯爵との間に見られる。スペインがイギリスのヴァージニア植民に反対した最大の理由はヴァージニアはスペイン領土であり、イギリスはスペイン領土を侵害しているというものであった。コーンウォリスは、イギリス人が西インド諸島航海中にスペイン側に捕らえられ、リスボンとセヴィリアに拘留されていることに対し、スペイン側の「救し」と「自由」を願うが、レモスは「寛大な措置」よりは「無慈悲」に気持ちが傾いている、と答えている。これに対しコーンウォリスは、そのような行動は他国に与える影響が大きく、西インド諸島への航海を禁止するよりもっと中庸な方法により西インド諸島における支配権と他の島々の所有を追及するほうがよく、それがスペインに計り知れない権力を与えることになるとレモスを説得する。スペインの西インド諸島征服に際しての現地人への残虐な行為、財宝の徹底的搾取を指摘し、原住民の状態を危険な状態に陥れることになるとスペインのこれまでの西インド諸島における行動を批判する。スペインは西インド諸島海域における他国の航行を禁止するという強硬な政策を取ったが、各国に投げかける波紋は大きいとコーンウォリスは反論する。ジェームズ一世はもともと公海における航行の自由主義を主張する立場を取って

いたが、コーンウォリスもジェームズ一世同様航行の自由政策を指示する立場を取る。公海の航行禁止は神の命令、自然と国際法に反する。神が作ったものを一国だけが独占するのは神の創造の意図に反するというのがコーンウォリスの主張である。これに対しレモスは、西インド諸島はスペインが最初に発見したからそれは当然スペインに属し、スペインが西インド諸島を自国だけに利用できるのは合法的であり、自然法、国際法に照らし合わせても問題はないとの見解を明らかにする。1606年の第一次特許状を得てからヴァージニア会社は入植者をヴァージニアへ送り込むが、ヴァージニアへの航海中にスペインによって船が拿捕されるという事態が生じ、それが互いへの批判・不満を生み出していた。コーンウォリスの書簡は初期のヴァージニア会社が直面していたスペインとの一つの問題点を明きらかにしている。スペインが強硬に西インド諸島海域の航行禁止を主張するのは単なる航行禁止ではなく、やはりイギリスによるヴァージニア植民阻止にその目的があったと考えられる。スペインとしてはもともと西インド諸島海域はスペイン領土の一部であり、イギリスがヴァージニア植民を企てる権利は本来存在しないという外交姿勢を持っていた。このスペインの主張は歴史的な根拠を欠く「ねつ造」であるが、スペインはローマ教皇を盾に北米の領土宣言を行う。なぜスペインがかくも強硬にイギリスのヴァージニア植民に異を唱えたか。一つにはヴァージニアが北米制圧の重要な拠点であるとの認識をスペインは示していた。スペインはフロリダに拠点を構えており、さらにはその拠点を北にまで広げたいという意欲を持っていたに違いない。ヴァージニアにはヨーロッパに輸出できる産物は何もなく、植民の初期においてはインディアンとの対立も植民を困難にしていた。スペインはヴァージニア植民には否定的な態度を示し、植民からの入植者の撤退とその崩壊を予想しているが、かくも強硬な態度の背後には単なる領土権侵害だけがその理由ではなかった。もっと深い反対理由があったと思われる。植民初期におけるスペイン大使コーンウォリスからのジェームズ一世への書簡がなく、スペインのヴァージニア植民初期に対する態度を我々は知ることができないが、コーンウォリスのレモス伯爵との会見はスペインの領土権主張を中心にした両国の北米における覇権争いの一端を見せている点において興味深い会見となっている。

イギリス側からのスペイン政府の情報はこの時期はこの他にはなく、我々がこの間のイギリスとスペインの関係を知るのはいギリス大使スニガを通してである。スペインはイギリスのヴァージニア植民に対していかなる態度を取っていたかをスニガのフィリップ三世への書簡から明らかにしたい。

スニガのフィリップ三世への最初の書簡は1606年3月16日である。1606年と言えばジェームズ一世が最初のヴァージニア会社への特許状を交付した年で、それが4月10日であったから、スニガは約一ヶ月前にすでにジェームズ一世の特許状の情報を入手し、次のようにフィリップ三世に書き送っている。

They also propose to do another thing, which is to send 500 to 600 men, private individuals of this kingdom to people Virginia in the Indies, close to Florida. They sent to that country some small number of men years gone by, and having afterwards sent again, they found a part of them alive.⁽⁴⁾

スニガは、イギリスがヴァージニアへ送る入植者の数を把握し、すでに何人かを送っているとも言っている。更には、ヴァージニアからインディアンをロンドンに連れて来、英語を教えたり、ヴァージニア植民の指揮者の名前を挙げたり、入植者としてヴァージニアへ連れて行く者は泥棒とか反逆者であるとの正確な情報を得ている。

They brought 14 or 15 months ago about ten natives, that they might learn English, and they have kept some of them here [London] and others in the country, teaching and training them to say how good that country is for people to go there and inhabit it. The chief leader in this business is the Justiciario [Chief Justice, Sir John Popham], who is a very great Puritan and exceedingly desirous, whatever sedition may be spoken of, to say that he does it in order to drive out from here thieves and traitors to be drowned in the sea. I have not yet spoken to the king about this; I shall do so when I see in what way they will try to satisfy me in the council.⁽⁵⁾

1606年4月の第一特許状に関して、スニガは以下のように言っている。

...the King [James I] over here has given them permission and his Patents to establish their religion in that Country [Virginia], provided they rob no one, under the penalty, if they do not obey he will take them under his protection.⁽⁶⁾

ジェームズ一世がヴァージニア会社に宗教の確立のため特許状を与えたとスニガは言っているが、ヴァージニア植民の第一の目的はキリスト教の布教であると特許状に記されていることを考えるとスニガの文言は正しい。スニガからのイギリスのヴァージニア植民着手の報告を受けたフィリップ三世はいかにしてイギリスの植民活動を阻止するかを真剣に考えていたかは、スペインのヴァージニア植民対策を知るうえで極めて興味深い。

You [Zuniga] will report to me [Philip III] what the English are doing in the matter of Virginia—and if the plan progresses which they contemplated, of sending men there and ships—and thereupon,⁽⁷⁾ it will be taken into consideration here, what steps had best be taken to prevent it.

フィリップ三世はヴァージニア植民に対しては当初から強硬な態度を崩さず、以後のスニガへの指令でも植民の核心、植民の決定についての確かさ、進行状況、誰がいかなる手段によって援助しているのかを報告するよう指示している。そしてジェームズ一世の植民許可に対してフィリップ三世の「遺憾」の念をジェームズ一世に伝えるよう言っている⁽⁸⁾。フィリップ三世のヴァージニア植民への関心はことのほか高いが、植民の実験期ともいえるべく初期の植民結果はかんばしくない。ヴァージニアから伝えられるニュースは本国にいるヴァージニア会社関係者を小躍りさせるようなものではなく、むしろ先行きを怪しまれる内容の報告が多い。そのような情報をスニガは入手し、フィリップ三世にヴァージニアで手に入る産物とは言えば、船のマスト用の木材、ピッチ、ロジンだけで、鉱物に関しても

得られるのは "bronse" (brass?) だけであるという⁽⁹⁾。フィリップ三世が喜ぶような貧弱な産物である。ところがヴァージニア会社関係者が送る現地からの報告にはヴァージニアは「パラダイス」「エデンの園」「カナン」といったバラ色の報告が続々と届いていたし、ヴァージニア会社も宣伝文書によって投機者、植民者の気持ちを煽るような文書を公表していたから、スペイン側としては内心複雑な気持ちであったに違いない。それらの公表された文書をスニガは当然目にしてから、ヴァージニアの現状を知って内心安堵のため息をつき、ほくそ笑むことになったであろう。ヴァージニア植民の失敗を願うスペインにとってヴァージニアの現状はまさに願ってもない現状であった。さらにヴァージニア植民推進者の一人である最高裁長官ポッパムが死去したのでヴァージニア植民事業は終わるだろうとの予想をたてている。スニガは、ヴァージニア植民はいずれは崩壊するであろうとの楽観的な立場を取っているが、その裏でヴァージニア襲撃をも王に進言し、イギリス側に対しては強硬な姿勢をも見せている。

スニガのフィリップ三世への書簡のなかで最も注目に値するのはジェームズ一世との会見報告である。スニガはヴァージニア植民についてジェームズ一世の真意をただそうとジェームズ一世に度々会見を申し込んでいたが、スニガによればジェームズ一世は会見を引き延ばしていた。スニガは1607年8月14日から20日の間にソールズベリーでの会見を申し込んでいる。このときはスニガが病気のため会見は実現しなかった。9月8日ジェームズ一世がウインザーにいたとき、再度スニガは会見を申し込んだが、指定された日時にスニガが行けず、会見は中止された。9月12日ジェームズ一世がハンプトンコートに来ることを知ったスニガ三回目の会見申し込みをする。このときもジェームズ一世は翌日の狩猟を口実に会見を断っている。ブラウンによれば⁽¹⁰⁾、ジェームズ一世は意図的にスニガとの面会をさげ、時間をかせぎをしていた。ヴァージニア会社経営陣はその間ヴァージニアへ船を送る準備をしており、スニガからの植民中止の要請を感じ取っていたからである。最終的にジェームズ一世との会見が実現したのは1607年9月27日であった。この年9月17日ジェームズ一世の娘のメアリーが2歳半で死んでいるのでジェームズ一世の気持ちはすぐれなかったと思われるが、スニガは単刀直入ヴァージニア植民についてジェームズ一世に質問をする。

Then I told him [James I] that Y.M. had ordered me to represent to him how contrary to good friendship and brotherly feeling it was, that his subjects should dare wish to colonize Virginia, when that was a part of the Spanish Indies, and that he must look upon this boldness as very obnoxious.⁽¹¹⁾

スニガの質問の要点は、(1)フィリップ三世はヴァージニア植民が両国の友好に反する行動であること(2)イギリス人がヴァージニアの植民に取りかかっていること(3)ヴァージニアはスペイン西インド諸島の一部であること(4)フィリップ三世はヴァージニア植民の大胆な行動を不愉快なこととして見なさざるをえない、の4点であった。両国の平和条約とスペイン領土への侵害はこれまで取り上げられてきたスペイン側の反論であり、とりたてて目新しい反論ではない。しかしこれらに対するジェームズ一世の返答はイギリスのヴァージニア植民についての王自身の口からの言葉としては看過できない内容の返答となっている。

スニガに対するジェームズ一世の返答から考えると、ジェームズ一世は全体的に「逃げ腰」で、ヴァージニア植民活動の責任を他人に転嫁している印象を与える。ジェームズ一世は以下のようにスニガに答えている。

He [James I] answered that he had not particularly known what was going on; that as to the navigation to Virginia he had never understood that Y.M. [Philip III] had any right to it; but that it was a very distant country [from] where Spaniards lived, and that in the Treaties of Peace with him and with France it was not stipulated that his subjects should not go there, except to the Indies, and that as Y.M.'s people had discovered new regions, so it seemed to him, that his own people might do likewise.⁽¹²⁾

スニガの質問に対してジェームズ一世はヴァージニア植民についての事態の推移については特に知っていなかった、といきなりヴァージニア植民を他人事のように切り出している。この会見の前年にヴァージニア会社に特許状を与えた一国の王としては余りにも無責任極まる発言である。スニガへの返答の最初からジェームズ一世の大国スペインを意識した及び腰の態度が窺われる。ジェームズ一世は、(1)フィリップ三世はヴァージニアへの権利を有していないこと(2)平和条約でも西インド諸島を除いてイギリス人がヴァージニアへ行くべきではないとの規定はないこと、最後に(3)未知の土地の発見権はいかなる国にもある、とスニガの上記の質問に答えている。スニガは(2)に対してだけ、ヴァージニアも西インド諸島の一部と見なしているのでイギリス人が決して西インド諸島へ行くべきでないことは平和条約の条件である、と反論する。ジェームズ一世の責任転嫁的な態度が知れるのは次のスニガへの返答である。

The King said to me that those who went, did it at their own risk and that if they [the Englishmen] came upon them [the Spaniards] in those parts there would be no complaint should they be punished.⁽¹³⁾

ヴァージニアへ行く人達は自ら危険を犯して行っているのであって、たとえ彼らがスペイン人よって捕まえられ、罰せられても何も不満はない、というのである。つまり、ヴァージニア入植者は王とは無関係であり、王はヴァージニア植民については全く責任はないという見解である。これはこれまでのヴァージニア会社及び植民の経緯を考えると極めて無責任な発言と受け止められる。ヴァージニア会社・植民関係者がこの王の発言を聞いたらいかなる反応を示したであろうか。ジェームズ一世のこの発言は真意なのかそれともスペインに対するリップサービスなのか。あるいはジェームズ一世はヴァージニア植民事業の限界ををいち早く察しし、ヴァージニア植民を放棄しようと考えていたのか。ヴァージニア植民が単なる植民のための植民ではなく、イギリスの将来を見据えた一大国家的プロジェクトであり、イギリスの政治、社会、経済、宗教等様々な問題を抱えた事業であったことを考えれば、ジェームズ一世はおいそれとこの事業を破棄することはできなかった。ジェームズ一世の植民及び植民者を突き放すような態度に王のいかなる態度を見てとったらいいか。ジェームズ一世のこのような発言にも関わらず、ヴァージニア会社は続々植

民者をヴァージニアへ送り続けている。植民者は王とは無関係であり、彼らは勝手なことをしているのだという発言には王の責任のがれの態度が見られるといってもよい。スニガはイギリス人の処罰は両国の親密な同盟にとってはいいことだとジェームズ一世に同意する一方で、ヴァージニア植民が散々たる状態のなかで行われており、今では植民活動が海賊行為と化し、これは断じて許されるべきではないと強硬な姿勢を示す。これに対してジェームズ一世は以下のように答える。

He [James I] told me [Zuniga] in reply that he had never known Y.M. [Philip III] was interested in this, but since I assured him it was so, and that they might send pirates out from there, he would seek information about it all, and would give orders that satisfaction should be given to me by the Council, and that he was inclined to think as I did, having heard it said that the soil was very sterile and that those having been sadly deceived who had hoped to find there great riches—that no advantage from it all came to him, and that if his subjects went where they ought not to go, and were punished for it, neither he nor they could complain.⁽¹⁴⁾

ここでもジェームズ一世は、フィリップ三世はヴァージニア植民に関心があるとは知らなかった、と信じられないようなことを言っている。この時期のスペイン大使コーンウォリスからのスペインからの情報はなく、コーンウォリスがヴァージニア植民についていかなる情報をスペインからジェームズ一世に送っていたかは知ることができないが、1604年にスペインと平和条約を結んでいることを考えれば、スペインが西インド諸島海域でのヴァージニア植民に無関心であったはずはなく、こういったスペインの動向はジェームズ一世の耳にも達していたであろう。しかしながら、ジェームズ一世は、他人事のようにフィリップ三世がヴァージニア植民に関心があるとは知らなかったと言っている。このあたりにもジェームズ一世のスペイン政府に対しての逃げ腰、及び腰の感が感じられないこともない。ジェームズ一世はスニガとの会見の中でスペイン側がヴァージニア植民について何を言うか内心気が気でなかったであろう。大国スペインだけとはにかく敵に回したくない。できれば友好関係を維持し、何とか大陸諸国の中で存在感を示したい。スペインの機嫌を損ねることなく、イギリスの直面する諸問題からの脱却を計りたいというのがジェームズ一世の真意であったろう。ジェームズ一世にとってスペインは国内外の問題を考えた場合最もごわい相手であった。ジェームズ一世のスニガとの会見はどちらと言えば威勢のいい若者が年寄りを詰問している印象を与え、そこからジェームズ一世はぬらりくらりと逃げようとしている感が強い。スペイン政府が後ろ盾しているのでスニガのジェームズ一世への問いつめも容赦がない。スニガのヴァージニア植民についての不満の一つはヴァージニア現地で期待していたほどの成果が上がらず、その結果入植者は暴徒化し、西インド諸島海域での海賊行為に走り、スペイン側も多大な被害を被っていることなのである。イギリス人が行くべくところでないところに行つて、処罰されても不満は言えないとスニガは主張する。横暴化する植民者に関してスニガは最善の改善策は植民事業を中止することだと単刀直入に言う。

I said in reply that the difficulties were such as must be considered and the best remedy was to prevent and cut it short from here, since it was publicly known, that two vessels had sailed from a port of this kindom for the Indies, and that two others were being laden here to go.⁽¹⁵⁾

ヴァージニアへ向かう船がすべて海賊化するとは限らないが、続々とイギリスを出航する船の情報を得たスニガはイギリス人は西インド諸島海域で海賊行為に従事するためにイギリスを出航しているとジェームズ一世に訴えている。これに対するジェームズ一世の返答はスニガに歩調を合わせるように、「彼らは手のつけられない連中で事態を是正したい」と返答している⁽¹⁶⁾。スニガの主張を全面的に受け入れ、少しの反論もしないジェームズ一世に王のスペインへの気兼ねのような印象を受ける。スニガはこのあとイギリス人はスペイン領土では丁重な扱いを受けると言うが、ジェームズ一世はスニガに対してスニガの言うことは確かであると答えている。ジェームズ一世は何とかして相手の機嫌を損ねることはしないという態度があったようである。相手のいいなりになり、スニガにいい印象を与え、フィリップ三世からおしかりを受けまいとする「いい子」ぶった姿勢が見られる。ジェームズ一世がスニガに対して強硬な態度を見せればスニガも態度を硬化させ、フィリップ三世への報告も険悪な報告となることは間違いない。スペインとの友好関係は1624年3月イギリスがスペインに宣戦布告をすることで終わるが、平和条約締結直後はスペインに対するジェームズ一世のへりくだった態度が著しく目立つのである。会見の中頃でもスニガは、ヴァージニア植民に関しては改善策が必要で事態が悪化する前に手段を講ずる必要があると再度ジェームズ一世に揺さぶりをかける。会谈の終わりでスニガはヴァージニア植民についての評議会の説明には時間がかかりそうであるが、その間にも入植者がヴァージニアへ送られ、防備が強化されており、早いうちにヴァージニアにいるわずかな入植者を根絶すべきだとの進言をフィリップ三世にしている。

I shall be careful to find out about what is going on, and I shall report to Y.M.; but I should consider it very desirable that an end should be now made of the few who are there, for that would be digging up the Root, so that it could put out no more.⁽¹⁷⁾

スニガのジェームズ一世とののは終始スニガ主導で行われている。スニガのヴァージニア植民に対する見解は、要するに植民そのものがスペイン領土の侵害であるから即刻中止すべきであるというものである。中止しなければスペイン政府は植民地破壊という過激な行動に訴えるというのがジェームズ一世に対しての最終通告である。会見から明らかなことは「大国」と「小国」の違いである。ジェームズ一世の相手のいいなりになる様は一国の王として又絶対王権を信奉する王としてはその面影は少しも感じられない。これはジェームズ一世のスニガの面子をたてる巧妙な作戦であったのか。いずれにせよジェームズ一世のヴァージニア植民への態度がスニガとの会見から窺い知れるという点においてこの両者の会見は興味深いものとなっている。

スニガとの会見で見せたジェームズ一世の対応は本音ではなかった。会見から一週間後スニガはフィリップ三世に書簡を送っている。そのなかで国務大臣ソールズベリーがジェームズ一世とヴァージニア植民について討議した後、ジェームズ一世は「イギリス人

が行ってはいらない所に行くとするれば、彼らを罰せられるに任せればよい」とスニガへの返答と同じことを述べ、更にソールズベリーは、植民問題を注意深く調べるとイギリスはヴァージニアへ行くことはできないようだと考えていると報告している。しかしながらこのようなスペインに譲歩した態度を示す一方で、ソールズベリーはまた以下のように言う。

He [Salisbury] says, he does not wish to do what he has been asked to do, in preventing their going and commanding those who are out there to return, and the reason of this is, because that would be acknowledging that Your Majesty is Lord of all the Indies.¹⁸⁾

入植者の阻止、ヴァージニアからの帰国命令というスニガからの要請は行いたくないのはフィリップ三世を西インド諸島の統治者と認めたくないからだとしつこく強気な発言もしている。ジェームズ一世はスニガの前では相手を気にしてかソールズベリーほどの強気な発言はしなかったが、フィリップ三世を西インド諸島の統治者として認めたくないという見解は、スペインの西インド諸島での領土権の否定に至り、これまでのジェームズ一世の態度とは全く異なる態度で、ジェームズ一世王朝のスペインに対する複雑な立場を表している。スニガのジェームズ一世との会見一ヶ月後、フィリップ三世はスニガに書簡を送り、「ヴァージニア問題におけるジェームズ一世との処理の結果に非常にうれしく思っている」¹⁹⁾とスニガのジェームズ一世への強硬な申し出に満足した様子を見せている。スニガは1610年4月（又は5月）まで駐英大使を勤めるが、その間イギリスはヴァージニア会社へ入植者を送り込む。それを聞くスニガは相変わらずフィリップ三世に対して何らかの手段を講じるべきだと再三フィリップ三世に要請する。スニガの主張はイギリスはヴァージニア植民を即刻中止すべきであり、中止をしない場合はヴァージニア攻撃もありうるというものであった。スペイン政府がヴァージニア襲撃を決意するのは翌1608年の夏以降で戦争委員会がフィリップ三世の認可を受け、ヴァージニア植民破壊のために船を見つけようとしていた。しかしながらスペイン側にも考慮しなければならない対外的な重要な問題があった。それはヴァージニアへ軍隊を派遣すると本国の防衛がおろそかになり、特にオランダとの険悪な関係上それは決してできないことだった。イギリスにとってスペインとオランダとの関係はヴァージニア植民延命の最大のメリットであったのである。スペインのヨーロッパ大陸における対外関係を知ってか知らずか、スニガ以後もしつこくフィリップ三世にヴァージニア植民に関しては決して妥協することのない厳しい態度を示すよう迫っている。フィリップ三世はスニガの強硬策にゴーサインは出さず、以後もイギリス側の植民の動向―植民者の数、兵力、海路―を報告するよう指示しているだけである。

スニガのヴァージニア植民に対する強政策と並行してジェームズ一世の長男ヘンリーとフィリップ三世の娘 MARIA との結婚が画策されていた。フィリップ三世は娘の結婚を機にジェームズ一世をフランスやオランダから手を切らせ、スペインと手を組ませたかったが事はうまく進まなかった。フィリップ三世がヴァージニア植民襲撃の最終的な許可を与えなかったのは案外娘の結婚を利用してヴァージニアからのイギリスの撤退を目論んでいたのかもしれない。フィリップ三世は「臆病で、怠惰で、無能で、業務の方針を寵臣のレルマ公爵に任せた。」²⁰⁾とブラウンは記しているが、もともと政治には不向きな人物で、行

動的な人ではなかったようである。だからこそ度々のスニガの強攻策の訴えにも耳を貸そうとしなかったのである。

スニガのジェームズ一世との会見から我々はヴァージニア植民が投げかけていた問題点を知ることができた。ジェームズ一世の弱気な煮え切らない態度に当時イギリスがいかにかスペインを無視できないか、またスニガの強気なジェームズ一世への問いから、ヴァージニアが直面していた問題の数々が浮き彫りされる。スニガの強硬な態度と何とか会見を切り抜け、ヴァージニア植民を続行したいと願うジェームズ一世とのかけひきから17世紀初頭の植民地活動の一端が垣間見られる。

2. ディグビー (Digby) とヴェラスコ (Velasco)

ディグビーは、1611年4月から1616年1月までスペイン大使を勤め、大使を止めた後、ジェームズ一世の息子チャールズ (Charles) とスペイン王女マリア (Maria) との結婚をまとめるためスペインへ行き、その後1622年に再度チャールズとマリアの結婚を進めるため大使としてスペインに行き、結婚話が破局に終わった後、1624年帰国している。ディグビーがスペイン大使となった1611年はジェームズ一世がヴァージニア会社に第一次特許状を与えてから5年、第二次特許状を与えてから2年が過ぎ、イギリスからのヴァージニア植民が本格化し、ヴァージニア会社も様々な困難に直面していた頃であった。コーンウォリスが大使を勤めていた時期がヴァージニア植民の創世期・実験期であるとするればディグビーの大使の時期は植民の発展期と言える時期である。ディグビーは大使としてスペインにいる間、スペイン政府のヴァージニア植民への動向をジェームズ一世にマドリッドから書簡で知らせ、スペイン政府がヴァージニア植民に対して不快の意を表明していることを明らかにしている。ディグビーは、フィリップ三世がヴァージニア植民を許可せず、スペイン軍がヴァージニア植民撤去を始めるであろうと何度かジェームズ一世に警戒心を喚起させている。フィリップ三世がイギリスのヴァージニア植民活動に不満を表している理由は二つあった。第一の理由は、スペイン生まれのローマ教皇アレクサンデル六世による西インド諸島全域のスペインへの寄進である。これについては、ハクルートが "A particular discourse" 第19章で歴史的な根拠のない主張であると厳しく批判しているが、スペインは第一に教皇の寄進をもとにヴァージニアはスペイン領土であるとの見解を主張していた。(注21: Hakluytsの正式なタイトルは "A particular discourse concerninge the greate necessitie and manifolde commodityes that are like to growe to this realme of Englande by the Westerne discoveries lately attempted, Written in the yere 1584. by Richarde Hackluyt of Oxforde..." で、これは『西方植民論』として『イギリスの航海と植民2』(1985, 岩波書店)で翻訳されている。) これに対してディグビーは1613年の書簡で、スペインの国務大臣がヴァージニアとバーミューダ島はスペインの征服による、と言ったのに対し、「私は、ヴァージニアやバーミューダ島がカステイク征服の一部であるということには決して譲歩することはできず、イギリス人が最初の所有者であった。」⁽²¹⁾と反論し、ヴァージニアとバーミューダ島はイギリス人が先有権をもっていると主張している。第二の理由は、1604年8月のスペインとイギリスとの間の平和条約締結である。この条約により、イギリスは西インド諸島を制圧しているスペイン領土への進出を断念せざるをえない状況に

追いやられていた。これに対してはジェームズ一世は公海における自由航行を主張し、スペイン側と対立していた。スペイン大使ディグビーは、スペイン国内におけるヴァージニア植民への反対の空気をジェームズ一世に報告しているが、それはスペインの強硬な態度である。17世紀初頭においてはスペインは「大国」である。強力な軍勢力を背景に中南米を制圧し、北米においてはフロリダまでその拠点を拡大しつつあった。それに反し、イギリスはヨーロッパの島国「小国」である。大国スペインを怒らせたなら自国がどうなるかわからない。ジェームズ一世が1604年スペインと平和条約を結んだ背景には大国スペインとの友好関係を維持しながらあわよくば大陸への進出の足場を築きたいとの思惑があったはずである。ジェームズ一世は争いごとを好まず、自らは「平和の王」(the King of Peace)、the Peacemakerと呼ばれていたが、とにかく他国特に大国スペインとの衝突だけは避けたいとの気持ちは特に強かった。1618年ローリーを処刑したのはスペインに機嫌をとるためであったし、1622年、三十年戦争のさなか、娘のエリザベスと夫のパラティン伯がドイツで孤立したのに彼らに援軍を送らなかったのもとはと言えばカトリック教国スペインの激怒に触れないためであった。北米からのスペイン産タバコのイギリス輸入に当初は反対しなかったのもジェームズ一世のスペインへの配慮のためであったが、マドリッドからのディグビーの報告にジェームズ一世は内心戦戦恐恐としていたにちがいない。ディグビーはスペインのヴァージニア植民への動きをジェームズ一世に報告しているが、1612年8月の最初の書簡で、「ヴァージニアのイギリス植民に反対の目的で出航した3,4隻のガレオン船」²²に言及し、翌月9月の書簡ではフィリップ三世はイギリスのヴァージニア植民は許可しない、と次のように言っている。

It is here held for certayne that this King [Philip III] will not permit Our plantation at Virginia, and the Bermudas, in so much that it is here publicly and avowedly spoken in the Court, that they will shortly attempt the removing of them.²³

スペイン領土であるヴァージニアのみならずバーミューダ島の植民化に反対するフィリップ三世及び両植民地からのイギリス人の撤去を画策するスペイン政府の動向がここには見られる。ディグビーはCarltonなる人物にあてた書簡でもヴァージニア植民撤去のためにポルトガルに集結しているスペイン軍やセヴィリアからのスペイン人がヴァージニアのイギリス人を打倒したとの報告についても触れ、いかにスペイン政府がヴァージニア植民に反対しているかを述べている。スペインが今にもヴァージニア襲撃を企てているかのごとく緊迫した情報が流布されている一方で、スペイン駐英大使スニガの外交文書では、ヴァージニア植民は恐るるに足らず、植民はいずれは自滅する、とスニガの自信にあふれたフィリップ三世への報告をもディグビーはジェームズ一世に伝えている。スニガの外交文書についてディグビーは次のように述べている。

I got a view of his [Don Pedro de Cunega] dispatch. The chiefe matters were...That there was no cause to apprehend so much danger in Virginia as they did Spaine, there being only as he [Zuniga] certaynly learned, five hundred men, who had of late suffered great extremitie and miserie, and that the first undertakers were growne so weary of supplying the

charge, that they were faine to make a generall kynde of begging...by the way of a Lottery for the furnishing out of those shippes and men which were sent; ²⁴

ヴァージニアにおける入植者の数、入植者の現地における過酷な試練、入植者をヴァージニアへ送る資金調達のための「宝くじ」の実施、スニガはヴァージニア植民についての的確な情報を入手し、それをフィリップ三世に報告している。スニガがいかなる経路からヴァージニア植民の実体について情報を得ていたか。現地からの最大の情報源はスペイン人のモリナ (Molina) なる人物である。彼はジェズイットで、宗教的目的からヴァージニアへ行ったと思われるが、彼の主たる任務は植民の実状を本国に伝えることにあった。二番目の情報源はをヴァージニアからスペインに連れて来たイギリス人入植者である。三番目はジェームズ一世宮廷に出入りするイギリス人のスパイである。スニガが巧みな情報網からいち早く重要な情報をキャッチしていたように、ディグビーもマドリッドでスパイを用い、スペイン側の動向をとらえている。ディグビーからのジェームズ一世への報告はスペイン軍がヴァージニア植民を解体させるために出航の準備をしているとの報告に終始している。1613年2月の書簡でディグビーはヴァージニアからイギリス人を追い払うためにリスボンに集結したスペイン艦隊に触れ、ヴァージニア植民がスペインにもたらす迷惑からフィリップ三世はヴァージニア植民を決して認可するとはないと述べた後で、スペイン軍がヴァージニアへ行くとするれば、それはキューバのハバナからであり、「二三人のふさわしい人物をスペイン海軍に送り込み、彼らがスペイン側の動向を伝える」と言っている。

Yf they [the Spanish] attempt anything against Verginia it will be the West Indian galleons from the Havana, in the island of Cuba, with the forces of those parts. I do meane presently to send downe a copule of fitt persons, whom I have provided to enter themselves into this King's service in his Navie, who I hope wilbe able to attaine in some part, to the knowledge of their intents, and to advertize me from time to time, of such things as they shalbe able to learne. ²⁵

この時期のディグビーのジェームズ一世への報告は終始一貫スペイン軍のヴァージニア襲撃であり、ジェームズ一世に対して危機感を煽る報告となっている。ディグビーと同時期、1610年から1616年までフランス大使を勤めたSir Thomas Edmondsからのジェームズ一世への報告もディグビーと同様の内容の報告で、スペイン軍がヴァージニアへ行き、ヴァージニアからのイギリス人の排除を計画している、と再三警告を発していることを考えるとスペインのヴァージニア植民への強硬な態度はこの時期ヨーロッパでは周知の事実であったようである。例えば1613年4月、Edmondsはジェームズ一世へ以下の書簡を送っている。

I have againe undertstood that parte of the forces which are prepared in Spayne are certainly intended to remove our plantation in Virginia. ²⁶

この時期まではディグビー、エドモンズ両大使はスペイン軍のヴァージニア襲撃が近いと

の予想では一致しているが、5月になるとディグビィはジェームズ一世に対して、スペイン政府はヴァージニア植民の現状を正しく把握するまでは行動を起こさず、ヴァージニア植民の自滅を期待していると述べ、スペイン軍の早期のヴァージニア襲撃の可能性はないかもしれないと述べている。スペイン内にはヴァージニアの様子をしばらく見てから行動を起こす立場を取る一派とスニガのように一刻も早く軍隊を派遣し、ヴァージニアからの入植者の一掃を主張する急進派がいた。ヴァージニア現地のインディアンとの対立、病気、飢餓による入植者の死という厳しい入植状況を逐次入手していたスニガからすればヴァージニア攻撃の絶好の機会であった。しかしながらスペインはついに実際の行動を起こすことはせず、ヴァージニア植民の崩壊を傍観するにとどまる。それはなぜか。スペインが、ヴァージニア植民はいずれ自滅すると考えていた理由はその資金である。王や国家からの資金の調達によってではなく「宝くじ」によって植民事業が維持されており、いずれは資金も底をつくとの見通しによるものであった。しかしながらバーミュダ島はヴァージニア以上に繁栄し、産物がバーミュダから持ち込まれ、高く売れている。その様子をスニガは見ており、即刻処罰を加える必要があると王に忠告する。ディグビィは同様の内容を他にも送っており、スペインが植民の実体を見極めるまで行動を控えているとの報告をしている。このようにスニガはイギリスのヴァージニア及びバーミュダ島における植民活動について詳細かつ正確な情報を入手し、それをフィリップ三世に送っているのである。スニガが英国のヴァージニア植民に関する情報を得ていたのと同様スペイン大使ディグビィもマドリードにおけるスペイン政府の動向をいち早く入手し、ジェームズ一世に送っている。スペイン側の対応は静観と行動の二つである。植民事業が自滅するのを待つ静観派とスニガを筆頭とする即座の襲撃によるヴァージニアからのイギリス人撤去である。ディグビィのスペインからの報告はもっぱら後者の急進派によるヴァージニア襲撃であり、彼はジェームズ一世以外の他のイギリス人への書簡でも同様の内容を送っている。1613年5月、枢密員となるLakeなる人物にスペイン政府のヴァージニア植民への対応を知らせ、スペインはヴァージニア植民について数回協議をもち、彼らの結論はヴァージニア植民は即刻撤去されねばならないが、植民の現状を把握するまで襲撃の実行を中止するのがふさわしい、ヴァージニア植民が自滅するのを期待しているからだ、というものであった。

...itt [the Plantation in Virginia] must bee removed but they thinke itt fitt to suspende the execution of itt 'till they receive perfect information in what state itt nowe is, for that they are in hope that itt will fall of itself.⁶⁷⁾

スニガは、1610年まで駐英スペイン大使を勤めるが、1613年新大使ゴンドマールがスペインを発った直後ジェームズ一世に対して新大使がイギリスに向かったこと、ヴァージニア植民はスペインにとって恐るるに足らないが最善の結論が得られるようにヴァージニア植民についての実状を得ること、ジェームズ一世とイギリス国民が植民についていかなる意図をもっているのか、あわせてバーミュダ島についても情報を送るようフィリップ三世はゴンドマールに指示している様子をディグビィはジェームズ一世に報告している。

...though yt was conceived by ye King of Spayne that the plantation and fortifications of the

Englishe in Virginia neede not (in the case yt now standeth) give muche cause of feare, yet to the ende, that heere may bee taken ye fittest resolutions, hee [Philip III] commaundethe him[Gondomar] to procure a true and certaine information of the present estate thereof. And what the intent of your Majestie and Englishe is in this pointe. And whether businesses of that nature growe not much colder since the death of the late Prince. And likewise, that hee informe himselfe very particularly concerning the Bermudos, and give speedy advertisement.⁽²⁸⁾

スペインにとってヴァージニア植民は両国の友好関係をないがしろにする容認しがたい暴挙であった。スペインはヴァージニア植民はいずれは自滅すると楽観的な態度を示している一方で、ヴァージニアから遠くないバーミューダ島でイギリスが着々と植民に従事する様子を聞き、内心ではバーミューダ島を基地にして北米の本格的な植民を始めるのではないかとの疑心があった。バーミューダ島からイギリスを追い出せばイギリスの植民熱は冷えると思ったのか、スペインはバーミューダ島に並々ならぬ興味、関心を示す。温暖な気候、動物、植物がイギリス人をバーミューダ島に引き留めていた大きな理由であるが、それにもましてスペインが恐れたのはバーミューダ島を拠点にしたイギリスの北米植民の本格化であった。スペイン側のヴァージニア及びバーミューダ島への関心をディグビイはジェームズ一世へ詳細に報告している。

ゴンドマルが駐英大使となってもスペイン側のヴァージニア植民への態度は変わらない。ディグビイは、スペインがヴァージニアからのイギリス人の排除を試み、また植民事業は自滅する、と報告を受けているとジェームズ一世へ書簡を送っている。そしてバーミューダ島植民の打倒についても会議をもっていたことも伝えている。

...I know that they [the Spanish] would have attempted the removing of the English from verginia, but that they are certeynly informed; the Business will fall of itself. And withinthese two daies I know both the Councell of Warr and of State, have satt about the over throwing of our new plamtation in the Bermudas;⁽²⁹⁾

ヴァージニアで捕らえられたスペイン人モリナがヴァージニアからスペイン本国及び駐英大使へ密かにヴァージニア植民の実状を伝える書簡を送っていることはすでに言及したが、ゴンドマルがモリナからの書簡を受け取ったことをディグビイは知っていた。ゴンドマルがモリナから書簡を受け取り、そこには植民者の窮状が書かれており、スペイン評議会はヴァージニア植民は自滅するからそれについては語ることは止めた、と言っている。

The Spanish Ambassador in England hath received Letters from Molina the Spaniard that is there, of the misery and distress in which they live; So that it is determined by this Councell, not to speake any more in that Busines, being a thing (they suppose) which will die of itself;⁽³⁰⁾

評議会在語るに値しないほどヴァージニア植民は絶望的な状況にあるとの認識をスペイン政府は示している。スペイン政府は、ヴァージニアにおける植民の現状から植民自体の絶

望的な将来を予想し、政府が懸念するほどの脅威をヴァージニア植民はスペインには及ぼすことはないとの楽観的な姿勢を見せ、高見の見物をしている。ヴァージニア植民の将来の展望は開けない程の現地の惨状がスペイン政府には届いていたのである。スペインのヴァージニア植民への否定的な見方はヴェラスコの後任の駐英スペイン大使ゴンドマールのフィリップ三世への書簡によって裏付けされている。ゴンドマールはヴァージニア植民の現状をフィリップ三世に植民者の数、病人の続出、食物の不足、イギリスへ帰国を望む植民者について以下のように記している。

there are about three hundred men there more or less; and the majority sick and badly treated, because they have nothing to eat but bread of maize, with fish; nor do they drink anything but water—all of which is contrary to the nature of the English—on which account they all wish to return and would have done so if they had been at liberty.⁽³¹⁾

ヴァージニアからの産物は造船のための豊富な木材にとどまり、入植者が期待する金・銀は産出されない。植民資金についても触れ、ロンドン商人と宝くじによって資金は調達されているが、植民からの利益には希望が持てず、ヴァージニア会社は入植者のバーミューダ島かアイルランドへの集団移動を考えていると言う。

But weary of spending so much money without any hope of reaping a profit, because the soil produces nothing, they now think of carrying all the people that are there to Bermuda or to Ireland by the coming Spring.⁽³²⁾

入植者のバーミューダ島やアイルランドへの移動はゴンドマールを欺くため、植民はあきらめられるとの印象を与えるためであったとブラウンは言っているが⁽³³⁾、不毛な土壌から利益の上がる産物は何も見つけられず、入植者が期待していたほど成果はあがらなかったというのはそれほどの外れな指摘ではない。イギリスもスペインも互いに情報収集にあたり、互いの動向を詳細に調べ、それぞれ本国に送っている。どちらと言えばスペイン側の情報網がイギリスの情報網より進んでいた印象を与えるが、裏を返せばいかにスペインがイギリスのヴァージニア植民について並々ならぬ関心を寄せていたかの現れでもある。面子丸つぶれのような行動をイギリスはヴァージニアで行っていると大国スペインは苦々しく思っていたに違いない。ディグビーがマドリードからスペインの動きをジェームズ一世に逐次伝えているが、そもそものイギリスによるヴァージニア植民へのスペインの最も大きな反対の理由の一つはヴァージニアを含めた一帯がスペイン領土であるにもかかわらず、イギリスがいわば領土侵犯を犯しているとの強硬な主張であった。これについてはすでに言及したが、ディグビーは「スペイン領土ヴァージニア」についても反論し、ヴァージニアがCastileの征服や教皇による寄進により歴史的にはスペインの領土であるとのスペインの主張には正当性を欠くものであるとの認識を示している。

I told him [the Spanish Secretary of State], that first I conceived hee had byne misinformed, that the Spaniards had divers yeares used to these parts now spoken of; which had byne of

late discovered & the Spaniards were never there untill the last Summer, when an Englishman lead them thither,...Secondlie, I could no way yeeld unto him that eyther Virginia or ye Bermudos were...parts of the conquest of Castile...³⁴

教皇の寄進によるとの主張に対しては次のように言う。

And that for the Pope's donation it was grown to be so lightly esteemed, that it was almost left to be alleadged by them [the Spaniards].³⁵

アレクサンデル六世によるヴァージニアのスペインへの寄進は、スペイン人によって主張されるだけで、他国からは問題にされていないことを示唆している。ディグビーは教皇の寄進を全く論外であるとみなし、それはスペイン側の一方的な宣言であるとの態度を示している。

ディグビーのジェームズ一世への書簡はこれで終わっている。ジェームズ一世への最後の報告がスペインのヴァージニアへの領土権否定で終わっているのは両国のそもそもの衝突の発端がヴァージニアの帰属権にあったことを考えると当然過ぎる反論であった。ディグビーの教皇寄進否定はこれまでのイギリスの反論の常套であり、格別新しい反論ではないが、ジェームズ一世に対して再度教皇寄進の否定によるヴァージニア植民のイギリスの正当化を訴えているのである。

ディグビーがスペインのヴァージニア領土権への反論を試みた頃に、スペインの領土所有の範囲を明確にし、航行の自由を訴える文書がイギリス政府内で書かれている。国の公式文書であるゆえ結論は明白であるが、いかにして政府がスペインのヴァージニア領土権を否定し、航行の自由を主張しているかは興味のあるところである。この文書での以下のように述べられ、ヴァージニアはイギリスに帰属するとの立場を明確にしている。

So that besides all those huge coasts & mighty inlandes lying southward of the Tropique of Cancer, which hitherto are quite free from any Spanish government; all those large & spacious countries on the East parts of America from 32 to 72. degrees of northerly latitude, have not nor never had any one Spanish Colonie planted in them; but are both by right of first discovery performed by Sebastian Cabota at the cost of King Henry the 7 th & also of later actual possession taken in the behalfe & under the sovereign authority of her Majesty, by the several deputies of Sir Walter Raleigh, & by the two English colonies thither deducted (wherof the later is yet ther remaining) as likewise by Sir Humphry Gilbert, Sir Martin Frobisher, Mr John Davis, & others, most justly & inseparably belonging to the King of England.³⁶

北回帰線南下の地域はスペイン政府の干渉を受けない一帯であり、北緯32度から72度にスペインの植民地が建設されたことはなく、イギリス人によって最初に発見されたからイギリスに所属する、と明確に述べられている。1606年の第一次特許状によってヴァージニア植民の範囲は北緯34度から45度に限定されていたのも以上の理由による。次にこの公式文

書は、イギリスが西インド諸島へ航行できるか否かの問題を扱い、既に言及したように航行の自由を主張している。反論はアレクサンデル六世による寄進の否定から始まるが、その一つに航海、交易権を挙げている。

All princes & estates had & have by the laws of nations the right of navigation in the sea, & the right of traffique, which the Pope by the fulnes of his authority cannot take from them; & the words of the said Bull are express that the Pope did not intende to take from any Christian Prince such right as he had obtained.⁶³⁷

国際法により航行、交易権があり、教皇といえどもこれらの権利を奪うことは出来ない。更にアレクサンデル六世の教書後フィリップ三世の祖先がイギリス王と協議し、両国は互いの王国・領土で自由に交易が出来ると同意しているから西インド諸島でもイギリス人は自由に交易ができると言う。航行・交易権は自然法、国際法によりすべての国に共通であるので教皇は他国に禁じるのは合法的ではない。

Seeing therefore, that the Sea & trade are common by the lawe of nature and of nations, it was not lawfull for the Pope, nor, is it lawfull for the Spaniard to prohibite other nations from the communicatio & participatio of this lawe.⁶³⁸

国際法によって守られているものを禁止することがあれば、すべての人は自らを守ることができ、また暴力には暴力によって抵抗できる。スペインのヴァージニア植民への反対意見に対してこの公式文書では過去の歴史的経緯及び法的観点から反論し、ヴァージニア植民の合法性を主張している。

この時期スニガのあとを継いだイギリス大使はヴェラスコである。彼は1610年4月（又は5月）から1613年までイギリス大使を勤め、その間スニガ同様ロンドンからフィリップ三世へヴァージニア植民についての情報を送っている。ヴェラスコの3年の赴任の間のフィリップ三世への書簡の内容は前任者のスニガと大きな違いはない。ヴァージニア現地の植民者の状況、イギリスからの入植者の出航、ヴァージニアからの入植者の追い出し、これらが繰り返しフィリップ三世へ報告される。赴任直後のフィリップ三世への書簡でヴェラスコは、ヴァージニアでのインディアンとの対立、貧弱な食糧不足から人肉や家畜を食べざるをえなくなった状況から、人々の植民の熱意も冷えていると言っている。

Thus it looks as if the zeal for this enterprise was cooling off, and it would on that account be very easy to make an end of it altogether by sending out a few ships to finish what might be left in that place, which is so important for pirates,...⁶³⁹

入植者の熱意も冷えつつある今こそヴァージニア襲撃の絶好の機会であると言うのである。ヴェラスコはヴァージニアにおけるインディアンとの対立と食料不足及び期待した金銀が産出されないからヴァージニア植民はたやすく壊滅すると楽観的な態度を示す。しかしその一方でヴェラスコはイギリスから出航する植民船には懸念を表明している。1610年

12月31日の書簡で次のように言っている。

They go with orders to fortify themselves once more and to build ships, on account of the great facilities offered in those countries, where they find an abundance of good oak-timber and pitch. Thus being so near to the 'Habana' [Havana], if they succeed with this, if they sail from there, they can reach it in 6 days, having fair weather; and this would be a very serious inconvenience for Y.M.'s fleets in case Y.M. determine to go to war.⁽⁴⁰⁾

ヴェラスコはヴァージニア植民の崩壊を予想しながら、他方続々と入植者がイギリスを離れる様子を見、植民の目的は他にもあるとの不安を示す。それはイギリスがヴァージニアを拠点としてスペイン植民地のフロリダにまで南下し、更にはそこから西インド諸島を始め、スペインの植民地を攻撃するかもしれないという不安である。イギリスがヴァージニアをスペイン植民地襲撃の拠点とするかもしれないという心配はこれまで示されたことがなかった。しかし、ヴァージニアには造船に必要な木材が豊富にあり、いくらでも船は造れる。とすればイギリスは一気に南下し、スペイン植民地の攻撃を計画する恐れがある。だから、ヴァージニア植民が困難をきたしている間にヴァージニアを攻撃し、イギリス人をヴァージニアから撤退させるのが得策であるとヴェラスコはフィリップ三世に進言するのである。スペイン側からしてヴァージニア植民の真の目的は依然として謎のままであった。ヴェラスコは赴任直後からヴァージニア植民は崩壊するとの予想をたてている一方で、その予想を裏切る形でヴァージニア会社が多くの植民者をヴァージニアへ送り込む状況を目にし、植民の真相に関しては頭を悩ませていたのである。フィリップ三世からも植民の理由を探せとの命令を受けており、ヴェラスコは植民の実体把握に奔走していた。赴任1年後のフィリップ三世への書簡のなかでヴェラスコはイギリス人の海軍将官William Monsonからヴァージニアについての詳細な情報を得ている。そのなかでモンソンはヴァージニアには金鉱は発見されず、防備も弱いためにインディアンによって滅ぼされると述べ、植民を維持することはできないと言っている。モンソンの情報のなかで重要なのは植民の目的についてである。彼は植民の目的について次のように言う。

Their principal reason for colonizing these parts is to give an outlet to so many idle and wretched people as they have in England, and thus to prevent the dangers that may be feared from them.⁽⁴¹⁾

イギリスの人口急増に伴い、無職者や乞食をヴァージニアへ送る計画は確かにヴァージニア植民の理由のひとつであったが、スペイン側はそれについては知っていなかった。ヴェラスコは、イギリスの社会的な問題解決の一方法として植民の理由の一つを知るに至るが、これはスニガやヴェラスコの予想外のことであった。モンソンはもうひとつ重要な点を暴露している。それはヴァージニアから「南海」（太平洋）へは行けないということである。イギリスはアジアとくに中国との通商に期待を抱いており、太平洋への通路の開拓にあたってきたが、アメリカ大陸を横断しての太平洋への到達は不可能であることが判明していた。ヴェラスコはモンソンからヴァージニアについての現状を知り、また植民の目的に

関しても従来の情報とは異なる情報を得ており、ヴェラスコとしてはヴァージニア植民についての認識を新たにしたに違いない。ヴェラスコはロンドン離任前の最後のフィリップ三世への書簡で、ヴァージニア植民について彼が知り得た情報を以下のように集約して王に送っている。

From there [Bermudas] it was to sail from [sic] Virginia, but now for more than nine months no news of it have been received, and according to the last reports it is believed that the people must have perished, partly from disease, to which the country is subject and partly from starvation, with which they were threatened, as the Indians kept them so closely besieged, that they could not come out from the fort to search for provisions. Thus this plantation has lost much ground, as it was sustained by companies of merchants, who were disappointed at finding no gold, nor silver mines, nor the passage to the South sea, which they had hoped for. They now fix their eyes upon the colony in Bermuda, partly because of its fertility and being unoccupied (by savages) so that they will meet with no opposition. When as it seems to them that in the course of time there must be a rupture with Y.M., they will be able from this island, which lies right in the way of ships returning from the Indies, to take many prizes, especially as there is but one safe harbor in the island, if they have time to fortify that, as they mean to do with great earnestness.⁽⁴²⁾

植民地における病気、飢餓、インディアンとの対立、金銀、太平洋航路の未発見、による植民熱の低下、ヴァージニアからバーミューダ島植民への政策転換、バーミューダ島からのスペイン船略奪の可能性、これらはヴァージニア会社が植民を始めた頃からスペインが入手していた情報であったが、ヴェラスコはヴァージニア植民が抱えていた問題点を的確にフィリップ三世へ報告している。ヴェラスコは1613年まで駐英大使を務めるが、3年間の大使勤務中イギリス国内外にスパイ網を張り巡らし、イギリスの動きを察していた。ヴェラスコ、そしてヴェラスコ以上にフィリップ三世はヴァージニア植民の動向に並々ならぬ関心を寄せ、ジェームズ一世を牽制していた。実際イギリスにはスペインがヴァージニアを襲撃するとの情報が流れ、一時緊迫した関係が続いた。スペインとしてはヴァージニア植民は植民地内外の悪化しつつあった諸条件のためにいずれは自滅すると楽観的な見解を取っていた。ヴァージニアは一時放棄される一歩手前まで追いやられたが、放棄されることなく植民が続行され、以後北米の拠点としての確固たる地位を築く。これはスペインにとっては大きな誤算であった。

ヴェラスコの後任のゴンドマルは1613年から1618年、2年間の病気治療のための帰国を経て再度1620年から1622年まで駐英大使を務める。彼は、スペイン大使としては評判が悪く、当時の劇にもその策士振りが描かれるほど悪名高い人物であり、ジェームズ一世を意のままに操ったと言われている。彼も赴任直後からヴァージニア植民についての情報をフィリップ三世に送っている。

ゴンドマルのフィリップ三世への記録に残っている最初の報告は大使として赴任直後の1613年10月である。ゴンドマルはヴァージニアから帰国した人達からヴァージニアについての情報を聞き出し、ジェームズ川に5つの要塞（とりで）があることに触れている

が、注目すべきは前任の二人の大使と同様、ヴァージニア殖民の絶望的な状況を容赦なく報告していることである。3百人位の入植者がいるが大半が病気でひどい扱いを受けているとか食物にも事欠き、皆が英国に帰りたがっており、もし自由になったら帰国したであろうとも言っている。ヴァージニアには重要な産物はなく、ただ船の建材だけが豊富にあるだけで、巨額な資金を注ぎ込んできた割には結果がかんばしくない。ヴァージニア殖民には将来はないことをゴンドマールは指摘する。

Thus weary of spending so much money without any hope of reaping a profit , because the soil produces nothing, they now think of carrying all the people that are there to Bermuda or to Ireland by the coming Spring.³⁴

イギリス側は、ヴァージニアを放棄し、入植者をバミューダかアイルランドへ連れていく計画であるとゴンドマールは言うが、これは事実と反している。ゴンドマールがイギリスによるヴァージニア放棄の情報をどこから得たかははっきりしない。ヴァージニア殖民が存亡危機にあったなかでもスニガやヴェラスコのようにゴンドマールはヴァージニア攻撃をフィリップ三世へ進言はしない。ヴァージニア植民攻撃がもたらす人的物質的な負担を考えると、ヴァージニア植民攻撃はそれほどまでの犠牲を払う必要はない。劣悪なヴァージニア殖民の現状に入植者は音をあげ、殖民地を放棄するであろうというのがゴンドマールの予想であった。ゴンドマールはヴァージニアからのイギリス人の撤退については極めて楽観的であった。1614年3月の報告でもゴンドマールは、ヴァージニア会社はジェームズ一世にヴァージニアから撤退の許可を申し込んでいるとも言っている³⁵。ゴンドマールのフィリップ三世への報告で特に注目すべき点はバミューダ島についての記述である。ヴェラスコもバミューダ島には言及していたが、ゴンドマールはバミューダ島への入植者の数、島の豊かな自然等に言及しており、ヴァージニアとは違ったバミューダ島描写となっている。周知のごとくバミューダ島がイギリス人によって発見されたのは全くの偶然の産物で、それはヴァージニア向かう船が難破し、漂流したどりついた先がバミューダ島であったのである。ヴァージニアへ向かう一行はバミューダ島で英気を養い、船を建造し再度ヴァージニアへ向かい、ヴァージニア撤退寸前に入植者を助けたのは有名なエピソードであるが、バミューダ島は風土も自然もヴァージニアとは比較にならないほどよく、その豊かな自然はマーヴェルの詩「バミューダ島」に描かれているほどである。ゴンドマールは、スペインのイギリス大使がフィリップ三世のバミューダ植民破壊とバミューダ島からのイギリス人追放計画をジェームズ一世に報告しているのを聞いたと言っているが、これはいかなる根拠に基づくのか。ゴンドマールは、イギリス人によるバミューダ島占拠は西インド諸島へのスペイン固有の権利に対する侵害と思っていたのか。それともイギリス以上にバミューダ島の重要性をスペインが理解したためであったのか、その真実は定かではない。いずれにせよイギリスがヴァージニアからバミューダ島へ殖民の拠点を移そうとしているというゴンドマールの指摘はこれまでは見られなかった指摘である。バミューダ島とは異なりヴァージニアに対するゴンドマールの酷評は驚きである。同じ1614年10月の報告ではゴンドマールはヴァージニアで捕まえられたモリナの言葉を引用して、入植者はフィリップ三世にヴァージニアを攻撃して、ヴァージニアから追い出してもらいたいと思っており、

銃を発射することなく入植者は降伏するとも言っている⁶⁶。入植者もヴァージニア植民の窮状にはや耐えられず、自ら撤退する気であった。1610年代初期のヴァージニアに対する一般人の評判はかんばくしくなく、ヴァージニア入植希望者を見つけるのは困難で、死刑囚ですらヴァージニアへ行くよりも絞首刑になったほうがよいと思っているほどである⁶⁷。ゴンドマールは、このようにヴァージニアの絶望的な状況をフィリップ三世へ報告し、ヴァージニア植民の自滅は時間の問題だと考えていた。1610年に本国ロンドンではすでに見たように二つの「宣言書」が出版され、そこではバラ色のヴァージニア植民が記されていた。それは幾分プロパガンダ的性格の強い宣言書でもあったが、ゴンドマールがフィリップ三世へ送ったヴァージニア報告とは全く逆の姿が描かれていた。ヴァージニア植民の理想と実体のギャップに幾分の驚きさえ覚える。ヴァージニア植民の現実にはヴァージニア会社が描いていた植民の理想とは著しくかけ離れたものであった。植民の将来に疑いの目が向けられるつつあったなかで植民関係者は必死に植民のイメージ改善を図ろうとした。ヴァージニアから帰国する船とともに現地から報告や書簡が届いたのであるが、会社側は都合の悪い情報はできるだけ公表しなかった。一般人達はヴァージニア植民の実体はそれほど詳細には知らされていなかったと思われる。一般人が知るヴァージニアはやはり「楽園」としてのヴァージニアであり、欲しい物は何でも手に入るばら色の「新世界」であった。このように考えると、スペイン側は早くからイギリス人よりヴァージニアの実体をはるかに正確に把握していたことになる。フィリップ三世へのゴンドマールの報告は他の二人と比べると数は多くない。1624年にジェームズ一世の特許取り消しによりヴァージニア植民を強硬に推進していたヴァージニア会社はあえなく解散するが、これはスペイン側が予想していた通りであった。ただ、ヴァージニア会社解散により植民事業が完全に終止符を打ったかというそうではなく、ヴァージニア植民はそれまでのジェームズ一世管轄の手を離れ、独自に植民の運営・管理にあたることにより、それが逆にヴァージニア植民を一層強固なものにしていくことになるのである。ヴァージニア会社解散以前にも1622年のインディアンによる大虐殺事件があり、ヴァージニアはその植民の危機に直面するが、残念ながらこれらについてゴンドマールの報告を知ることはできない。ゴンドマールが事件を聞いていたら、小躍りしたにちがいない。それほど壊滅的な影響をこの事件はヴァージニア植民に及ぼしたのである。インディアンによる襲撃、ヴァージニア会社解散とヴァージニア植民はスペインの予想通りに展開するが、しかし、ヴァージニア植民が完全に終わったわけではない。これはスペイン側からすれば大きな誤算でもあった。

むすび

これまでヴァージニア植民の時期にイギリスに滞在したスペイン大使のフィリップ三世への報告を基に、スペインにとってヴァージニア植民がいかなるものであったのかを見てきた。共通して言えることはヴァージニア植民に対するスペインの否定的な見方である。中南米に君臨するスペインからすれば、いきなりイギリスが自国の支配領域で植民活動を始めたことは全く寝耳であった。17世紀におけるスペインは大国である。今で言えばアメリカのような存在であった。その大国スペインにヨーロッパ北方の小国イギリスの行為は大胆極まる行為であった。それでもスペインは現地からの情報収集によりイギリスは

ヴァージニア植民をあきらめ、ヴァージニアから撤退するであろうと楽観的に予想していた。ヴァージニア植民が最もあてにしていた金銀採掘は全くの夢物語であることが判明した。その事実をいち早くキャッチしていたのは他ならぬスペインであった。金銀採掘が不可能であればヴァージニア植民は遠からず破棄されるとスペインは高をくくっていた。しかし、植民はその予想に反し続けられ、それが今のアメリカ国家の基盤となった。ヴァージニア植民は前にも触れたように、特許状に記されている宗教的使命がその第一の目的ではなかった。その証拠に宗教関係者は初期にはほとんどいなかった。ヴァージニア植民は、17世紀初頭のイギリスの様々な問題を植民という形で解決し、イギリスの将来を左右する国家的事業であったと言える。であればこそ国中があれほどまでに植民の宣伝に奔走したのであろう。著名な説教家を使い、ヴァージニア植民擁護、推進の説教をしてもらったのもこのような理由による。スペインはいつになったらヴァージニア植民が終わるか、いつ入植者はヴァージニアから撤退するかを待ち望んでいたであろうが、スペインの思惑通りに事は進まなかった。案外、イギリスがヴァージニアから撤退したらスペインがヴァージニアに活動の場所を移し、北米制圧の拠点としてヴァージニアを利用したかもしれない。ヴァージニア植民の重要性を一番よく見抜いていたのはスペインであったかもしれない。

注

- (1) Wesley F. Cravan: *Dissolution of the Virginia Comapny* (Gloucester, Mass. 1964)を参照。
- (2) Alexander Brown: *The Genesis of the United States* (Boston and New York, 1890) 2nd vol., p.1025.
- (3) Sir Ralph Winwood: *Memorilas of affairs of state in the reigns of Q. Elizabeth and K. James Ied. by E. Sawyer* (London, 1972), Vol. II, pp. 386-8.
- (4) Brown, pp. 45-6.
- (5) Brown, p. 46.
- (6) Brown, p. 88.
- (7) Brown, p. 91.
- (8) Brown, p. 103.
- (9) Brwon, p. 110.
- (10) Brown, p. 118.
- (11) Brown, p. 120.
- (12) Brown, p. 120.
- (13) Brown, p. 120.
- (14) Brown, p. 121.
- (15) Brown, p. 121.
- (16) Brown, p. 121.
- (17) Brown, p. 122.
- (18) Brown, pp. 123-4.
- (19) Brown, p. 125.
- (20) Brown, p. 967.
- (21) Brown, p. 668.

- (22) Brown, p. 577.
- (23) Brown, p. 579.
- (24) Brown, p. 594.
- (25) Brown, p. 607.
- (26) Brown, p. 623.
- (27) Brown, p. 635.
- (28) Brown, p. 636.
- (29) Brown, p. 656.
- (30) Brown, p. 657.
- (31) Brown, p. 660.
- (32) Brown, p. 661.
- (33) Brown, p. 661 note 2.
- (34) Brown, p. 635.
- (35) Brown, p. 669.
- (36) Brown, p. 672.
- (37) Brown, p. 673.